

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日                      2 0 0 3 年    5 月    8 日  
Date of Application:

出 願 番 号                      特 願 2 0 0 3 - 1 3 0 3 6 4  
Application Number:

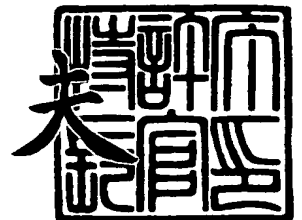
[ST. 10/C]:                      [ J P 2 0 0 3 - 1 3 0 3 6 4 ]

出    願        人                      西 川 ゴ ム 工 業 株 式 有 限 公 司  
Applicant(s):

2 0 0 4 年    2 月 1 6 日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今 井 康 夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 P044409

【提出日】 平成15年 5月 8日

【あて先】 特許庁長官 殿

【発明者】

【住所又は居所】 広島県広島市西区三條町 2 丁目 2 番 8 号 西川ゴム工業株式会社内

【氏名】 矢野 徹

【発明者】

【住所又は居所】 広島県広島市西区三條町 2 丁目 2 番 8 号 西川ゴム工業株式会社内

【氏名】 作田 信幸

【特許出願人】

【識別番号】 000196107

【氏名又は名称】 西川ゴム工業株式会社

【代理人】

【識別番号】 100105647

【弁理士】

【氏名又は名称】 小栗 昌平

【電話番号】 03-5561-3990

【選任した代理人】

【識別番号】 100105474

【弁理士】

【氏名又は名称】 本多 弘徳

【電話番号】 03-5561-3990

## 【選任した代理人】

【識別番号】 100108589

【弁理士】

【氏名又は名称】 市川 利光

【電話番号】 03-5561-3990

## 【選任した代理人】

【識別番号】 100115107

【弁理士】

【氏名又は名称】 高松 猛

【電話番号】 03-5561-3990

## 【選任した代理人】

【識別番号】 100090343

【弁理士】

【氏名又は名称】 栗宇 百合子

【電話番号】 03-5561-3990

## 【手数料の表示】

【予納台帳番号】 092740

【納付金額】 21,000円

## 【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 0002931

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 生分解性樹脂組成物

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 L-乳酸を含む共重合樹脂（１）と、D-乳酸を含む共重合樹脂（２）とを含有してなることを特徴とする生分解性樹脂組成物。

【請求項 2】 前記L-乳酸を含む共重合樹脂（１）が、少なくともL-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記D-乳酸を含む共重合樹脂（２）が、少なくともD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であることを特徴とする請求項 1 に記載の生分解性樹脂組成物。

【請求項 3】 前記多価アルコールが、ポリプロピレングリコールであることを特徴とする請求項 2 に記載の生分解性樹脂組成物。

【請求項 4】 前記多価カルボン酸が、クエン酸であることを特徴とする請求項 2 に記載の生分解性樹脂組成物。

【請求項 5】 前記L-乳酸を含む共重合樹脂（１）が、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記D-乳酸を含む共重合樹脂（２）が、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であることを特徴とする請求項 1 に記載の生分解性樹脂組成物。

【請求項 6】 前記糖類が、澱粉であることを特徴とする請求項 5 に記載の生分解性樹脂組成物。

【請求項 7】 前記共重合樹脂（１）と共重合樹脂（２）との配合割合が、前者：後者として、90：10～10：90（重量比）であることを特徴とする請求項 1～6 のいずれか 1 項に記載の生分解性樹脂組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、生分解性樹脂組成物に関するものであり、詳しくは優れた耐熱性を有するとともに、生分解性速度や熔融粘度の制御が可能な生分解性樹脂組成物に関するものである。

## 【0002】

## 【従来の技術】

従来から、軽量で加工性にすぐれ、腐食、分解しにくい特性を利用した各種プラスチック製品の多くが市場に出まわり、安価で、かつその利便性から、人の生活面や各種産業面の隅々にまでゆきわたってきている。一方、このような状況に対応して、使用後の前記プラスチック製品の廃棄物量が年々増加の傾向にあり、そのうえ、腐食、分解しにくい特性の物質であることから、これが大きな公害問題になってきている。

かかる情勢に対処して、上記の腐食、分解しにくいプラスチック製品に代わる、自然界に存在する生物、特に土や水の中の微生物により容易に、そして、最終的に水と二酸化炭素に分解される各種の生分解性樹脂の開発がなされ、環境保全型製品として注目されている。

生分解性樹脂として、例えばポリヒドロキシカルボン酸の製造方法は、下記特許文献1に開示されている。

## 【0003】

## 【特許文献1】

特開平10-204157号公報

## 【0004】

## 【発明が解決しようとする課題】

近年、生分解性樹脂の適用範囲は多岐にわたり、中でも耐熱性を一層改善する要求が当業界にある。

したがって本発明の目的は、優れた耐熱性を有するとともに、生分解性速度や熔融粘度の制御が可能な生分解性樹脂組成物を提供することにある。

## 【0005】

## 【課題を解決するための手段】

本発明者らは、鋭意検討の結果、下記の構成により、上記課題を達成することができた。

即ち、本発明は以下の通りである。

1. L-乳酸を含む共重合樹脂(1)と、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)とを

含有してなることを特徴とする生分解性樹脂組成物。

2. 前記L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であることを特徴とする前記1. の生分解性樹脂組成物。

3. 前記多価アルコールが、ポリプロピレングリコールであることを特徴とする前記2. の生分解性樹脂組成物。

4. 前記多価カルボン酸が、クエン酸であることを特徴とする前記2. の生分解性樹脂組成物。

5. 前記L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であることを特徴とする前記1. の生分解性樹脂組成物。

6. 前記糖類が、澱粉であることを特徴とする前記5. の生分解性樹脂組成物。

7. 前記共重合樹脂(1)と共重合樹脂(2)との配合割合が、前者：後者として、90：10～10：90（重量比）であることを特徴とする前記1. ～6. のいずれかの生分解性樹脂組成物。

#### 【0006】

上記構成によれば、優れた耐熱性を有するとともに、生分解性速度や熔融粘度の制御が可能な生分解性樹脂組成物が提供される。

#### 【0007】

##### 【発明の実施の形態】

以下、本発明をさらに詳細に説明する。

本発明の生分解性樹脂組成物は、前記のように、L-乳酸を含む共重合樹脂(1)と、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)とを含有してなることを特徴としている。

本発明で用いるL-およびD-乳酸は、商業的に容易に入手可能であり、例えば市販されている純度50%から95%までのいずれのものも利用可能であるが

、入手の容易な 90% 乳酸が好ましい。

#### 【0008】

ここで本発明の第一の実施形態によれば、前記 L-乳酸を含む共重合樹脂 (1) が、少なくとも L-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記 D-乳酸を含む共重合樹脂 (2) が、少なくとも D-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であることが好ましい。

また、本発明の第二の実施形態によれば、前記 L-乳酸を含む共重合樹脂 (1) が、少なくとも L-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記 D-乳酸を含む共重合樹脂 (2) が、少なくとも D-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であることが好ましい。

#### 【0009】

まず、本発明の第一実施形態、即ち、前記 L-乳酸を含む共重合樹脂 (1) が、少なくとも L-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記 D-乳酸を含む共重合樹脂 (2) が、少なくとも D-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂である実施形態について説明する。

第一実施形態で使用される多価アルコールとしては、例えばポリビニルアルコール、グリセリン、ポリエチレングリコール、ポリプロピレングリコール等が挙げられ、中でも得られる樹脂の吸湿性を低減することのできるポリプロピレングリコールが好ましい。この場合のポリプロピレングリコールの分子量は、1000～3000 が好ましい。

共重合樹脂 (1) および (2) において使用される多価カルボン酸としては、2 個以上のカルボキシル基を有する化合物であればとくに制限されないが、クエン酸、リンゴ酸、コハク酸等が挙げられ、中でもクエン酸が好ましい。

#### 【0010】

また、第一実施形態において、L-または D-乳酸の使用割合は、共重合樹脂 (1) または (2) に対して 50～99.99 質量% が好ましい。L-または D-乳酸の使用割合が 50 質量% 未満では、機械的強度や耐熱性が低下し、逆に 9

9.99質量%を超えると、市販のポリ乳酸と同等となり、生分解速度が低下するため好ましくない。

また、共重合樹脂(1)および(2)において、多価アルコールの使用割合は、1~50質量%が好ましい。多価アルコールの使用割合が1質量%未満では、生分解性速度や溶融粘度の制御が困難であり、逆に50質量%を超えると樹脂強度が低下することになり好ましくない。

また、共重合樹脂(1)および(2)において、多価カルボン酸の使用割合は、0.1~20質量%が好ましい。多価カルボン酸の使用割合が0.1質量%未満では、生分解性速度や溶融粘度の制御が困難であり、逆に20質量%を超えると樹脂強度が低下することになり好ましくない。

なお、共重合樹脂(1)および(2)それぞれは、多価アルコールおよび多価カルボン酸の種類は同じであってもよいが、異なってもよい。

#### 【0011】

次に、本発明の第二実施形態、即ち、前記L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、前記D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂である実施形態について説明する。

第二実施形態で用いるL-およびD-乳酸は、前記のように例えば市販されている純度50%から95%までのいずれのものも利用可能であるが、入手の容易な90%乳酸が好ましい。

また、共重合樹脂(1)および(2)において使用される糖類としては、とくに制限されないが、澱粉、ブドウ糖、ショ糖、酢酸セルロース等が挙げられ、中でも原料コスト、反応性等の点から澱粉が好ましい。

#### 【0012】

また、第二実施形態において、L-またはD-乳酸の使用割合は、共重合樹脂(1)または(2)に対して30~99質量%が好ましい。L-またはD-乳酸の使用割合が30質量%未満では、耐熱性が低下し、逆に99質量%を超えると、生分解速度が低下するため好ましくない。

また、共重合樹脂(1)および(2)において、糖類の使用割合は、0.01



～20質量%が好ましい。糖類の使用割合が0.01質量%未満では、生分解性速度や熔融粘度の制御が困難であり、逆に20質量%を超えると着色が著しく、樹脂強度も低下し好ましくない。

なお、共重合樹脂(1)および(2)それぞれは、糖類の種類は同じであってもよいが、異なってもよい。

#### 【0013】

また、本発明において、いずれの実施形態に係る共重合樹脂(1)および(2)も、公知の各種重合法を採用して合成することができるが、製造工程数、原料コストを勘案すると無溶媒直接重合法により合成するのが好ましい。すなわち、前記各種反応成分を反応容器に仕込み、反応触媒を添加し、減圧下、加熱、攪拌し、反応させることにより合成することができる。このときに使用する反応触媒は、通常のポリエステル重合に使用する触媒であればいずれのものであってもよいが、原料の乳酸が多量の水を含む場合があるので、優れた耐加水分解性および触媒活性を有する触媒が好ましい。例えば有機スズ化合物、具体的にはモノブチルスズオキサイドが好ましい。

#### 【0014】

このようにして得られた共重合樹脂は、次のような重量平均分子量を有するものが好ましい。

L-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を含む共重合樹脂(1)：重量平均分子量1,000～10,000,000。

D-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を含む共重合樹脂(2)：重量平均分子量1,000～10,000,000。

L-乳酸および糖類を含む共重合樹脂(1)：重量平均分子量1,000～10,000,000。

D-乳酸および糖類を含む共重合樹脂(2)：重量平均分子量1,000～10,000,000。

また、いずれの実施形態に係る共重合樹脂(1)および(2)も、例えば1軸または2軸押出機、ニーダーのような公知の樹脂混合機を用いて均一に混合することができる。また、共重合樹脂(1)および(2)をそれぞれペレット化し、

両者をドライブレンドした後、射出成形機内で混合および成形を行ってもよい。また、少量の場合は、それぞれの樹脂を有機溶剤に溶解した後、混合し乾燥してもよい。

#### 【0015】

L-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を含む共重合樹脂（１）とD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を含む共重合樹脂（２）との配合割合は、前者：後者として、90：10～10：90（重量比）、さらに好ましくは70：30～30：70であるのがよい。この範囲内であれば、耐熱性を一層高めることができる。

また、L-乳酸および糖類を含む共重合樹脂（１）とD-乳酸および糖類を含む共重合樹脂（２）との配合割合は、前者：後者として、90：10～10：90（重量比）、さらに好ましくは70：30～30：70であるのがよい。この範囲内であれば、耐熱性を一層高めることができる。

#### 【0016】

本発明の生分解性樹脂組成物は、生分解性速度や熔融粘度の制御を容易に行うことができる。例えば生分解性速度の制御は、共重合物質の澱粉、多価アルコール、多価カルボン酸の添加量を増量することにより、熔融粘度の制御は、澱粉の添加量を増量することにより行うことができる。

#### 【0017】

このようにして得られた本発明の生分解性樹脂組成物には、必要に応じて、成型加工性、樹脂強度、難燃性等の向上を目的として、ヒュームドシリカ、湿式シリカ、カーボンブラック、タルク、マイカ、クレー、アルミナ、黒鉛等の各種無機充填剤を添加してもよい。また耐衝撃性を上げる目的で、脂肪酸、大豆油、菜種油、ロジン等の植物油系軟化剤、セルロース粉末、繊維、天然ゴム、ファクチス等を添加してもよい。さらに発泡させることを目的として、重炭酸ナトリウム、重炭酸アンモニウム、炭酸ナトリウム、炭酸アンモニウム等の無機発泡剤や、アゾジカルボンアミド、p, p'-オキシビスベンゼンスルホニルヒドラジド等の有機発泡剤を添加してもよい。

#### 【0018】

**【実施例】**

以下、本発明を実施例によりさらに説明するが、本発明はこれらの例に制限されるものではない。

**実施例 1**

少なくとも L-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂 (1) の調製

還流塔を設置した 90 リットル容の逆円錐リボン翼式リアクタに、90% L-乳酸 25 kg、ポリプロピレングリコール ( $M_w = 2000$ ) 7.8 kg、クエン酸 0.5 kg、触媒としてモノブチルスズオキサイド 15 g を投入し、反応温度 190℃ で、真空度を 9 kPa (70 Torr) から 0.01 kPa (0.1 Torr) まで徐々に上昇させながら、翼の回転数を 130 rpm として 22 時間反応を行った。得られた共重合樹脂 (1) の重量平均分子量は、約 200 万であり、融点 (mp) は 121℃ であった。

**【0019】**

少なくとも D-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂 (2) の調製

450 mm の空気冷却管と外部攪拌装置を取り付けた 500 ml 容のセパラブルフラスコに、D-乳酸 200 g、ポリプロピレングリコール ( $M_w = 2000$ ) 62.4 g、クエン酸 4 g、触媒としてモノブチルスズオキサイド 0.1 g を投入し、反応温度 190℃ で、真空度を 9 kPa (70 Torr) から 0.01 kPa (0.1 Torr) まで徐々に上昇させながら、22 時間加熱攪拌した。得られた共重合樹脂 (2) の重量平均分子量は、3 万であり、融点 (mp) は 128℃ であった。

**【0020】**

本発明の組成物の調製

外部攪拌装置を取り付けた 500 ml 容のセパラブルフラスコに、前記で調製した共重合樹脂 (1) および (2) をそれぞれ 100 g ずつ入れ、フラスコ内を窒素置換した後、190℃ で 30 分間攪拌し、冷却した。得られた組成物の融点 (mp) は 185℃ であり、優れた耐熱性を有することが確認された。

また組成物を土中に2ヶ月埋設処理したところ、生分解されていることも確認された。

### 【0021】

#### 実施例2

少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂(1)の調製  
還流塔を設置した90リットル容の逆円錐リボン翼式リアクタに、90%L-乳酸30kg、コーンスターチ30g、触媒としてモノブチルスズオキサイド15gを投入し、反応温度190℃で、真空度を9kPa(70Torr)から0.01kPa(0.1Torr)まで徐々に上昇させながら、翼の回転数を130rpmとして22時間反応を行った。得られた共重合樹脂(1)の重量平均分子量は、48万であり、融点(mp)は155℃、ガラス転移点(Tg)は51℃であった。

### 【0022】

少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂(2)の調製  
450mmの空気冷却管と外部攪拌装置を取り付けた500ml容のセパラブルフラスコに、D-乳酸200g、コーンスターチ0.2g、クエン酸4g、触媒としてモノブチルスズオキサイド0.1gを投入し、反応温度190℃で、真空度を9kPa(70Torr)から0.01kPa(0.1Torr)まで徐々に上昇させながら、22時間加熱攪拌した。得られた共重合樹脂(2)の重量平均分子量は、12万であり、融点(mp)は148℃、ガラス転移点(Tg)は47℃であった。

### 【0023】

#### 本発明の組成物の調製

外部攪拌装置を取り付けた500ml容のセパラブルフラスコに、前記で調製した共重合樹脂(1)および(2)をそれぞれ100gずつ入れ、フラスコ内を窒素置換した後、190℃で30分間攪拌し、冷却した。得られた組成物の融点(mp)は211℃、ガラス転移点(Tg)は59℃であり、優れた耐熱性を有することが確認された。

また組成物を土中に2ヶ月埋設処理したところ、生分解されていることも確認

された。

【 0 0 2 4 】

### 実施例 3

下記表 1 に示す配合・反応条件により得られた樹脂 1 と樹脂 2 を下記表 2 の配合割合比率でドライブレンドした後、クリモト（株）製 K R C ニーダ（2 軸押出機）を用いて混合し樹脂組成物を得た。各樹脂組成物の評価結果を下記表 2 に示す。

【 0 0 2 5 】

【表 1】

表 1		
項 目	樹脂 1	樹脂 2
(配合)		
Ｌ－乳酸(ビュラック社製)	30kg	—
Ｄ－乳酸(ビュラック社製)	—	30kg
デンプン(コーンスターチ)	30g	30g
モノブチルスズオキサイド	15g	15g
(反応条件)	140℃ × 3h, 9kPa(70Torr) 195℃ × 3h, 9kPa(70Torr) 195℃ × 3h, 0.5kPa(4Torr) 195℃ × 15h, 13Pa(0.1Torr) (合計, 24 時間)	140℃ × 3h, 9kPa(70Torr) 195℃ × 3h, 9kPa(70Torr) 195℃ × 3h, 0.5kPa(4Torr) 195℃ × 13h, 13Pa(0.1Torr) (合計, 22 時間)
Mw	230,000	210,000

表 2

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹脂 1	100	80	70	60	50	40	30	20	—
樹脂 2	—	20	30	40	50	60	70	80	100
融点(℃) <sup>注 1</sup>	152	200	201	205	215	214	209	209	147
結晶化サンプルの 結晶化温度 (℃) <sup>注 2</sup>	—	69.1	—	—	—	—	—	—	—
結晶化サンプルの 融点(℃) <sup>注 2</sup>	126.2	175.9	181.9	184.4	185.9	183.8	182.2	177.4	116.8
非結晶化サンプル の結晶化温度 (℃) <sup>注 2</sup>	82.3	66.3	59.8	59.9	67.0	70.1	75.8	—	—
非結晶化サンプル の融点 (℃) <sup>注 2</sup>	123.5	164.9	164.9	171.1	157.5	160.3	161.9	—	—

【0026】

注 1 : 融点の測定には、島津製作所製フローテスター CFT-500C を使用した。

注 2 : 融点の測定には、PERKIN-ELMER 製熱分析装置 DSC-7 を使用した。

結晶化サンプルの作製条件：50℃で3日間真空乾燥した。

非結晶化サンプルの作製条件：窒素ガス中で220℃に加熱し、完全溶融した後、液体窒素中で急速冷却した。

#### 【0027】

上記表2より、樹脂1と樹脂2を混合した樹脂組成物は、樹脂1、樹脂2のいずれか単独のものよりも融点が格段に高く、優れた耐熱性を有するものと判断される。また、上記表2の樹脂組成物No. 1～9を土中に2ヶ月埋設処理したところ、樹脂1と樹脂2を混合した樹脂組成物No. 2～8は、いずれも生分解されていることが確認された。

#### 【0028】

なお、前記実施例では、L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂である例と、L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂である例の、2種類の実施例のみを取り上げて説明したが、本発明はこれに限定されない。すなわち、L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であり、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であってもよいし、L-乳酸を含む共重合樹脂(1)が、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂であり、D-乳酸を含む共重合樹脂(2)が、少なくともD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂であってもよいし、また、これらに限定されず、その他の組み合わせであってもよい。

#### 【0029】

##### 【発明の効果】

本発明によれば、優れた耐熱性を有するとともに、生分解性速度や溶融粘度の

制御が可能な生分解性樹脂組成物が提供される。



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 優れた耐熱性を有するとともに、生分解性速度や溶融粘度の制御が可能な生分解性樹脂組成物を提供する。

【解決手段】 L-乳酸を含む共重合樹脂（１）と、D-乳酸を含む共重合樹脂（２）とを含有してなることを特徴とする生分解性樹脂組成物。共重合樹脂（１）としては、少なくともL-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂が、共重合樹脂（２）としては、少なくともD-乳酸、多価アルコールおよび多価カルボン酸を共重合して得られる共重合樹脂が挙げられる。これとは別に、共重合樹脂（１）としては、少なくともL-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂が、共重合樹脂（２）としては、少なくともD-乳酸および糖類を共重合して得られる共重合樹脂が挙げられる。

【選択図】 なし

特願 2 0 0 3 - 1 3 0 3 6 4

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [ 0 0 0 1 9 6 1 0 7 ]

1. 変更年月日	1 9 9 0 年 8 月 1 0 日
[変更理由]	新規登録
住 所	広島県広島市西区三篠町 2 丁目 2 番 8 号
氏 名	西川ゴム工業株式会社